

第19回 大賞(金賞)受賞作品

「普通じゃない」

徳島県立富岡東高等学校三年 藤川 諒子



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞

大賞 〈金賞〉

『普通じゃない』

徳島県立富岡東高等学校三年 藤川諒子

「もう、オレは学校に行けない」

その声には切実な響きがあった。

はつとして隣を見ると、物心ついた頃からの幼なじみの顔は今まで見たことがないほど暗く沈んでいた。

いつもと同じ、学校からの帰り道。同学年で固まって帰る中、一人また一人と「また明日ね」と手を振り、消える。最後に残るのは家が同じ住宅街にあるぼくと正史まさしだけだ。

そして、一人つきりになつたとたんに正史が深刻に呟つぶやいたのだった。学校に行けない、と。

思い返せば、今日正史は帰り道で一言も発していなかつたような気がする。いつもは先頭に立つてヒツキムシで戦争ごっこを始めたり、タンポポ笛をピーピー吹きならしたり、一度なんかは用水路をカメが泳いでると言って落っこちて靴をびしょびしょにしたことだってある。そんな正史が大人しくしているなんてすんごく変だ、ということにぼくは今さら気づいた。

「なんで？ なんかあつた？」

「……」

「あ、もしかしてあれ？ 先生に今日ちょっと怒られたからとか……」

「ちがう」

「じゃあ……、あ、給食があんまりおいしくないからとか」

「ちがう」

「じゃあ……、なに？」

ぼくはもうなんにも思い付かなかつた。正史はよくなんかやらかして先生に怒られたりはしてたけど、いつもそんなの気にしてないみたいで楽しそうだったから。正史が学校に行けないなんて言うのは、ぼくにはちょっと信じられなかつた。



「……なあ」

「なに？」

「……」

正史はやつと何か言いかけたのかと思ったら、また黙ってしまった。いつも余計なことまでしゃべってるのに、今日はやたらと口が重そうだ。

代わりにぼくがしゃべった方がいいのかな、とも思つたけど、ぼくはそんなにしゃべりたいこともなかつたし、第一ぼくがしゃべりだしたら正史はもう家までだんまりを続けるんじゃないかなって気がしたから、ぼくはじつと正史の言葉を待っていた。

「……オレさあ」

しばらくして、正史はそれだけ言つた。でもまた黙ってしまう。それでもぼくはしんぼう強く待ち続けた。

もう家が見えてきた辺りになつてようやく正史は言つた。

「……なんか、かぜおこせるようになつたみたいでさ」

沈黙。

「は？　かぜ？　……風邪、ひいたの？」

「ちがうって、風を起こせるんだよ」

横を見たけど、ふいっと目をそらされた。でも、体の前で両手を振り子みたにぶうんと振るジェスチャーのおかげで、正史の言う「かぜ」が「風」であることは伝わつた。——いや、でも風？　風を起こせるってなんだ？

「今日さ、テストん時にオレのテスト、風で飛ばされたじやん。窓も開いてないのに、周りのヤツのも飛んでつたじやん」

「うん」

確かにあつた。正史の辺りの席だけ風でテストが飛ばされて、先生が拾い集めていた。窓が閉まってたから、みんなちょっと騒いでいて、先生も首をかしげていた。

「あれ、オレがしたんだよ」

ぼくは正史と机をはさんで向かい合つて正座していた。自分の家と同じくらい慣れた正史の家のリビング。いつもはテレビを見るか、ゲームをするか





だから、こんなふうに真っ正面から向き合って座ることなんてめったない。

そして、机の上には鉛筆が一本。

それを正史が緊張した面持ちで、何か大切なものを扱うようにそっと手に取つた。一度深呼吸をしてから構える。ぼくもそれを息を詰めて見つめた。

「じゃあ、いくぞ」

ぼくがうなずいたのを確認してから、正史はちよいと指を操つた。同時に、鉛筆がくるりと一回転した。

瞬間——、風が起きた。ぼくと正史の髪がなびき、服がはためいた。後ろでバサバサと音を立てるものに振り返ると、お手紙ボックスの中の手紙類が踊っていた。一番上の一枚がぶわっと舞つた。その一枚の紙の動きがちよつと普通じやがない。

ぼくらの周りをぐるりぐるりと巡つてゐるのだ。理科の授業で習つた人工衛星みたいだと思った。ぼくらを——いや、正確には正史を軸にして紙が宇宙を舞つてゐる。

やがて風は收まり、紙は床に落ちた。正史は無言で立ち上がり、それを拾い上げると元の通りお手紙ボックスの紙の束に重ねて、乱れた束をとんとんと合わせた。

ぼくは自分の目で見てもまだ信じられなかつた。座り直した正史に、ぼくは困惑と興味の入り交じつた微妙な笑顔で尋ねた。たずねた。

「ねえ、正史。これなに？」

「だからオレにもわかんねえって」

こうして正史が実演してくれる前に、一応話を聞いていた。とても信じがたい話を。

いわく——

正史のペン回しによつて風が起きる。

クラスにペン回しのうまいヤツがいて、正史はそれに憧れて練習しているらしい。実はぼくも練習しているけれどまだできない。ちょっとばかしコツがい



賢治のまちから

高校生☆言語大賞

正史が先にできるようになつて、ぼくは一週間くらい前に自慢を受けた。それからも正史はしょっちゅうペン回しをしていた。そんなにペン回しをしてどうするんだと聞きたくなるくらい、それはもうしょっちゅうだ。ペン回しを極めたところで何にもなれやしないのに。——と思つていたのだが、正史は何かになつてしまつたらしい。

「もう学校には行けないよ」

正史にしては珍しい氣弱な声でぽつりと言つた。視線も机の上に落ちていて、目が合わない。

「なんで？ 学校は行けるでしょ」

「行けないだろ。だってバレたらどうするんだよ」

「ペン回ししなけりやいいじやんか」

「もうクセんなつてるから、無意識でしちゃうんだよ」

「そんなんの……」

ぼくは言葉を失つた。

本当に正史はもう学校に行かないのだろうか？ 今までずっと一緒にいた幼なじみがない学校というのは、想像しただけでも味気ないものに思われた。正史がいない学校なんて、きっと静かで退屈な、この世で最もつまらない場所だろう！

「ねえ、その風つて今日いきなり出たの？」

「ああ、テストの時に急にさ。今まで全然だつたのに」「じゃあさ、明日になつたらもうなくなつてるかもよ」

「……そうだといいな」

その後も、ああだこうだと色々話したけれど、原因も何もわからないからどうしようもない。でも、今日が金曜日だったのは運が良かつた。とりあえず明日学校に行くか行かないか、という問題については考えなくて済む。ひとまず、明日の朝また正史の家に来るという約束をして、ぼくはほんの数メートル離れた自分の家に帰つた。

次の朝、もう一度正史はペン回しをしたけれど、やっぱり風が巻き起こつた。正史の両親は共働きで昨日ぼくがいたときにはまだ帰つていなかつたけれど、今日は正史のお母さんがいたから、バレないよう今度は正史の部屋

でくるりとした。正史のごちやごちやした部屋がさらに「ごちやごちやになつた。

また次の朝、つまり日曜日。また正史の部屋で鉛筆をくるり。やっぱり風が起こつた。しかもなんだかだんだんその強さが増していつている気がする。今度は物を全部部屋の隅っこに追いやつっていたから、部屋は荒れなかつた。

そして、月曜日。もはや驚きは皆無かいむ。ペン回しの風が吹き荒れた。でもぼくは、学校に行かないと言い張る正史を無理やり学校に引っ張つていった。ぼくだって、なにも考えずにこの週末を過ごしていたわけではない。どうにか解決策を見つけようと頭を働かせていた。そして考え出した策が一つ。これは根本的な解決にはならないけれど、結構な名案だとぼくは思う。朝の学活が始まる前に、ぼくは正史に秘密兵器を渡した。

受け取った正史は何も言わなかつたけれど、顔でわかる。踏んづけられた力エルみたいな顔。「げえっ」って感じだ。明らかにイヤそうだ。ぼくが渡したのは「えんぴつくん」。鉛筆を正しく持つための道具だ。低学年の時は皆鉛筆に装着していた。正式な名前は知らないけれど、一年生のときからえんぴつくんと呼んでいるから、ぼくらの間では通じる。

「えんぴつくん付けとけばペン回しきできないんじゃないかなと思つて、探したんだ」

「こんなの付けられるか！ ガキじゃあるまいし」

「そんなこと言つたつてしまふがないじゃん。別に誰に見せるわけでもないんだし、授業中だけでも付けときなよ」

「いらねえ！ 帰る！」

ガタンと勢いよく立ち上がり、ランドセルをひつつかんで教室から出て行こうとする正史をぼくは追う。

「ちょっと待つて！」

「待ちなさい！」





ナイスタイミング。担任のクモ先生が教室にやつて來た。本当は南雲先生だけど、手足がクモみたいに長くてひょろいからみんなクモ先生って呼んでいる。もちろん本人の前では言わないけど。

「南雲先生！」

ぼくは先生の登場にほつとした。これで正史を止められる。

「正史くん、朝の学活が始まりますよ。みんなも、席について」

「なんだよクモ！ オレは帰るんだ！」

先生の目の前でクモなんて堂々と言う正史にぼくは焦あせつたけれど、先生はそこはスルーしてくれた。

「正史くん、何かあつたんですか？」

こう聞かれて正史に答えられるはずがない。「何か」はあった。でも言えない。

「……別に、なんも」

「じゃあ席に着いて。まずは朝のあいさつですよ」

おはようございます、とみんなで声を合おとなわせた。正史はむつりと口をつぐんでいたけれど、それ以上抵抗はせず大人しく席に着いた。

結局、一日正史はえんぴつくんを使わなかつた。ただ、鉛筆も握らなかつた。筆箱をランドセルにしまつたまま、授業をぼんやり聞いていた。クモ先生は何度か注意したけれど、てんで言うことを聞かなかつた。

次の日、正史は学校には來たけれど、やっぱり鉛筆を握らなかつた。でも、さすがに先生に怒られて、二時間目からはしぶしぶノートをとつていった。ペン回しはどうにかせずに耐えたみたいで、何も起こらなかつた。

しかし、その次の日、水曜日に事件は起ころ。

社会の時間、とうとう正史はペン回しをしてしまつたのだ。くるりと一回転した鉛筆とともに、風がぶおんと巻き起こつた。

ああ、やつてしまつた。正史はもう学校に来られない。

やっぱり学校に無理やり連れてこなきや良かつたかな。ちらりとそんなことも思つた。でも、正史が大人しくあのえんぴつくんを使つていれば、きっ



とこんなことにはならなかつたんだ。正史に突き返されてぼくの筆箱の中に
あるえんぴつくんを恨みがましく見つめてみたけれど、教室で風が吹き荒れ
ているという事実は変わらない。

ようやく風が収まつて、みんなのプリントが散らかつた教室内を見回す
と、みんなぽかんとしていた。正史だけが唇を噛み締めてうつむいていた。
ぼくはどうにかごまかそうと必死でしゃべつた。

「うわあ、びっくりした。急にすごい風だつたね」

ぼくは言うことなんか誰も聞いていやしない。みんな正史を見ている。そ
りやそうだ。風の中心に正史はいたんだから。

でもぼくはしゃべり続けた。

「ほら、プリント拾おうよ。みんなのプリント飛んでつちやつたよ」

ぼくの努力もむなしく、クラスの女子の安田^{やすだ}が口を開いた。

「今のこと……、正史くんがやつたの？」

正史は嘘^{うそ}をつかなかつた。

ただ黙つて、こくんとうなずいた。

ぼくはきつく目を閉じた。

ごめん、正史。正史の言うように学校には来ない方が良かつたかもしけな
い。正史が風を起こせるつてことが広まつたら、どうなるだろう。国の研究
機関とかが正史を連れて行つちゃうんだろうか？ 正史には会えなくなつち
やうんだろうか？ そんなのは、正史が学校にいないことよりもずっとイヤ
だ。

「実は……、わたしもなんだ」

安田の声に、ぼくは「へえっ？」と顔を上げた。正史を見ると、正史もぽ
かんとしている。

「あたしも」

「ぼくも」

「オレも」

教室内で口々に上^あがる声。ぼくは困惑していた。正史も目をまん丸くして
きょろきょろと教室を見回している。

「ど、どういうことだよ？ みんな風を起こせるのか？」

正史が聞くと、みんな「違う」と首を振つた。

「じゃあ、どういうことだよ」

「こういうこと」

みんなはそれぞれ顔を見合わせ、「セーの」と声をそろえた。

その途端^{とたん}、教室内ではいろんなことが起こった。

最初に言い出した安田はパチンと指を鳴らした。するとポツと火が現れた。その一瞬後にピカッと強烈な光が瞬いた。それとほぼ同時に教室中の机や椅子がガタガタ震え出した。ザアッと勢いよく水が落ちてきた。静電気みたいに体がピリッとした。いつの間にか木が一本教室の中に立っていた。ぼくが気づいたことだけでこれだけのことが起こっていた。本当はもっといろんな事が起きていたんだろう。

ぼくは呆気にとられてただ突っ立っていることしかできなかつた。

同時に色々なことが起きた中に、きっと相性の悪いものもあつたんだと思う。

教室の隅で悲鳴が上がつた。見ると、机が燃えていた。かなり勢いが強くて、真っ赤なドレスを着た踊り子の凄まじいダンスみたいだつた。火は見る間に勢いを増していく。みんな火とは反対の壁際^{かべぎわ}に集まつていた。空気が熱くなつっていく。

「下がつてなさい」

声が響いた。クモ先生だ。

言われなくともみんな下がつてゐる。先生は廊下に消火器を取りに行く気はなさそうだ。どうするのかと、みんな火に對峙するクモ先生の動きを見守つた。

急に気温が下がつた気がした。

先生の背の向こうで踊つていたはずの火は消えていた——というより凍りついていた。火だけでなく、教室の隅は丸々氷におおわれていた。

ぼくつて人間はすんごく普通だと思つてた。

幼なじみがちょっと（いや、かなりかな）やんちゃで、クラスでも目立つた。だから余計にそう感じたのかもしれない。

でも僕が思つてた普通つて、全然普通じゃなかつたみたいだ。



だって、教室中で信じられないようなことが起きている。みんなが何か特別な力を持っている。この状況では一番普通じゃないのはむしろぼくかもしれない。

ぼくはなんだか怖くなつて教室を飛び出した。廊下を走り抜けて、階段を一段飛ばしで駆け下りる。すぐ後ろを足音が追いかけてきている。

「おい！ 待てよ！」

正史の声が聞こえた。

ぼくは何かから逃げているかもわからないまま、ただ、捕まるわけにはいかないと思って、必死で逃げた。でも正史は運動神経抜群で、ぼくはそうでもないから、ちょっとずつ足音が追つてくる。

あんまり焦つて、ぼくはとうとう足を絡ませてしまった。階段で、勢いがついてたもんだから、体が宙に投げ出される。ぼくはきつと目をつむり、体を丸めて衝撃ショウゲキを待つた。

しかし、衝撃は訪れなかつた。

「おわっ！」

響いた叫び声はぼくのものではない。正史の声だ。ぼくは恐る恐る目を開けた。

目の前が真っ白く光っていた。蛍光灯だ。どうやら仰向けでいるらしい。だが、背に床の硬さは感じられない。方向感覚を失いながらも、手を伸ばしてどうにか床に触れる。床は想定より少し下にあつた。

ぼくは宙に浮いていた。床からほんの十センチ程度だが、このおかげでぼくは床に叩きつけられずにすんだようだ。

「いってえ。おい、そんなんできるんなら言えよ」

声のした方を見ると、正史が肩の辺りを押さえて壁にもたれていた。落ちたぼくを持ち前の反射神経でかわしたものの、壁にぶつかつたらしい。「いや、ぼくもこんなの初めてだよ」

「大丈夫ですか！」

クモ先生が慌てて階段を駆け下りてきた。ながーい足で、なんと二段飛ばしだ。後からクラスメイトたちがぞろぞろと現れる。



賢治のまちから

高校生☆童話大賞



ぼくはその見慣れた顔たちを眺めた。ちょっと今までとは違つて見える気がする。

みんな普通じゃない。ぼくも普通じゃない。普通なんてどこにもない。

「みんな変だ」

ぽつりと呟くと、ぼくはもう耐えられなくなつて吹き出してしまつた。
ぼくらはみんな違つてる。

それが普通のかも知れない。

そう思った。